## すよっとそこまで、~お散歩日和(地域編)~ 🥎

光が丘美術館をさらに奥に進むと、古民家風の建 物が見えてきます。ここが、蕎麦処「桔梗家」です。 鳥海家の次男隆守氏が経営されている会津蕎麦のお 店です。蕎麦と言えば、信州がすぐに頭に浮かびま すが、会津も引けを取らない名産地です。

店主は、毎日、会津の玄蕎麦(収穫されたままの 設付きの蕎麦の実)を自家製粉で石臼挽きしている。 そうです。しかも、蕎麦の風味が強く、喉越しも良 い「九一蕎麦(蕎麦粉9:小麦粉1」だとか。

建物も貴重な古民家で、わざわざ埼玉県小川町で 養蚕業を営んでいた農家の建物を移築したそうです。何から何まで凝りに凝った趣きを大事にしています。









ここで少し脱線しますが、混じりっ気のない蕎麦 という意味で「生蕎麦」(きそば)という言葉よく 使われます。と同時に、このような看板やのれんも よく見かけます。しかし、いつも思うのですが、「生

蕎麦」とは読めません。さてどうしてなのでしょうか。

これは、変体仮名についての知識がなければ解けない謎です。明治33年(1 900年)のことです。この年に、「小学校令」が改正され、同時に出された「小 学校令施行規則」にて「仮名字体を一定する」ということが定められました。



実は、その時まで、今私たちが使っているような平仮名の 文字がもっとたくさんあったのです。万葉仮名とも呼ばれて いるものです。したがって、古文書の研究をしようと思うと、 まずはこの変体仮名を習得していかなくては何も読めない

ぁゅ	(阿)	t	世	(世)	ld	て (者)
, W	(131)	ž	ろ	(智)	υ	환 <sub>(飛)</sub>
っす	(宇)	₹	糁	(楚)	ıšı	<b>XA</b> (M)
ž 12	(II)	t:	為	(多)	^	<u>څ</u>
ぉね	(館)	<b>5</b>	ち	(知)	Œ	福 (保)
ූ  නි	(可)	5	ほ	(徒)	IJ.	<b>ち^</b> (*)
<sub>い</sub> かっ	(tn)	5	m	(JID)	ŧ	は (※)
ぃぉ	(嘉)	5	18	(派)	ъ	英 (美)
* K	(起)	τ	T	(天)	г	(≘) ع
古 浅	(機)	τ	萝	(李)	ø	免货
· 尧	(書)	٤	쒿	(登)	ŧ	<u>ቅ</u> (€)
< \$	(貝)	٤	东	(東)	ŧ	<b>液</b> (N)
₹ }	(久)	Q:	あ	(奈)	10	<b>№</b>
, <b>ð</b>	(前)	ts:	漎	(排)	k)	<b>(</b> (m)
ょき	(古)	E	J	(尓)	J.	ኒ <sub>(5)</sub>
± \$	(左)	ıc	ቕ	(尓)	n	<b>?</b> (H)
* 18	(佐)	sta .	急	(器)	a	<b>3</b> (18)
惠	(あ)	ła	袮	(初)	b	₹ (±)
,も	(春)	ø	æ	(能)	ಹಿ	<b>る</b> (**)
,募	(寿)	Ø	鄱	(野)	在	拨曲
步	(勢)	は	ŧ	(者)	h	<b>え</b> (先)

ということになります。例えば、うなぎ屋の暖簾にある「な」の字は、元の漢字が同じ 「奈」ですので、現在の「な」とよく似ていますが、漢字の崩し字である名残りをより強く留めたひらがな ということが見えてきます。

ということで、この「生蕎麦」を解体すると、右のようになります。元の漢字は「幾楚者」を使っていたことになります。

さて、脱線はこれぐらいにして本題に入ります。この桔梗家の売文句の1つが「地下200mから汲み上げた美味しい水を使用」となっています。これは一体どういうことなのでしょうか。



これこそが田柄水道組合(現:田柄町水道利用組合)の汲み上げ井戸です。いや、そもそも田柄水道組合 とは何なのでしょうか。

田柄水道が設立されたのは昭和38年5月のことで、828世帯でのスタートでした。もともと田柄地区は台地上にあり水利の不便な地域で、水田はもとより畑作にしても良質な土地が少ない地域でした。そんな

中、徐々に宅地化が進んだこともあって水道の普及が必要だったのです。しかし、東京都の水道敷設計画はもっと先になることが分かっていたので、だったら自分たちで作ろうではないかということになり、当時の地元選出の区議会議員であり、初代の区議会議長でもあった上野徳次郎氏が旗振り役となって完成させたものでした。彼の家はもともとこの地の村役人を務めた家柄で、現在も立派な長屋門が残っています。(豊島園通り田柄4丁目バス停前)ただ、今行くと空き家で痛みが激しいのが気になります。

設立の目的は、飲用水はもちろん、消火用水の確保もあって、右上の写真に「防災井戸」の表示が見られるように、その志は現在にも繋がっています。

現在の状況は、深井戸施設(深さ118~120m)が6か所、水道本管はのべ25㎞、3か所に自家発

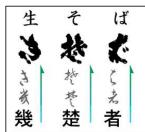
電機を備え、消火栓も112か所に設置されています。そして、1 日当たりの給水量は1,200 t にも及んでいます。



戦後間もなくの一時期、都内でも数多くの私設水道が敷設されましたが、練馬区内で現在も活動しているのはこの田柄水道と東大泉 (東映撮影所の西隣)「大泉名水会」の2か所だけになりました。

東京都の水道が普及している現在もまだ続いている理由を事務局の方に尋ねると、いくつかの理由を挙げて説明してくださいました。

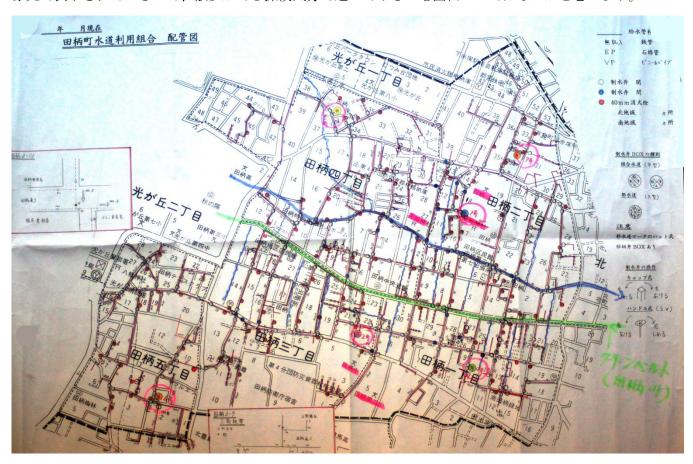
- ・「大泉名水会」の利用世帯数が約500世帯であるのに対して、田柄水道組合の現在の利用数は2、660世帯(都内最大規模)と、依然多くの利用者がいることが最大の理由である。これは田柄全世帯数13,923世帯中19%の割合に相当する。人数に対する割合も田柄の全住民28,974人に対して5,580人が使用しており、その割合は同じく19%となっている。
- ・田柄地区の住民は昔から地元意識が強く、その表れとして、自分たちが作った水道を守り続けていきたい



という思いが継続させているように思われる。

- ・東京都に切り替えるとなると、水道の新規敷設のための費用負担が必要になり、今更の気持ちが強い。
- ・現在の東京都の水道水も美味しくなったけれど、地下200mの地下水を使用しているので、こちらの方が美味しいというイメージが根強い。(※水質基準を満たすために消毒もしているとのこと。)
- ・消火用水の確保も目的とし、さらに、万が一の場合の非常用水源としての意義も強く感じている。

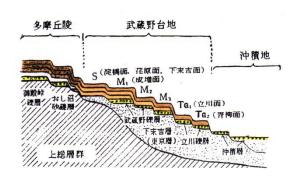
かなり見づらいのですが、田柄水道の配管図面を見せてもらったので紹介します。6か所の井戸の位置が 赤丸で表示されているので、散歩がてら探検気分で巡ってみるのも面白いのではないかと思います。



最後に、事務局の方が、「田柄水道の水源は、遠く多摩川の源流と繋がっていると言われています。」と言いながら、その根拠となる地質断面図を示されました。よく分からないと思いますが、簡単に言えば、200mの深さの井戸を掘っているということは、「上総層群」という関東平野の基盤を成す地層にまで掘り下げているということです。

図内にちらりと見える「東京層」が西新宿の高層群を支えている地盤で、10m ぐらいでその姿が見えるのだそうです。ということは、田柄用水の井戸はそれより もはるかに深い位置まで掘っていることになり、その地下水脈が遠く奥多摩と繋が っていると言われても、あながち根拠のない浪漫とは言えないような気がします。

## [東京の段丘断面図]



ということで、何をお伝えしたかったのかと申しますと、蕎麦処「桔梗家」は、この田柄水道を利用して営業されているということです。古くからお住まいですから当然ですかね。そして、その水源がテニスコート脇の井戸だということです。ガッテンしていただけましたでしょうか? (終)

